

市原市草刈遺跡周辺の有角石器が語ること

－草刈六之台遺跡出土有角石器の新発見例の紹介を兼ねて－

蜂屋孝之

はじめに

市原市草刈遺跡は、昭和53(1978)年から区画整理事業に伴って調査が開始された30haにも及ぶ広大な遺跡である。千葉県屈指の旧石器時代から中世に至る多数の遺構・遺物が検出された遺跡として有名であり、弥生時代に限ってみても、中期後半の宮ノ台式期から後期末までの大規模な集落跡が発見されている。すでに発掘調査報告書が完結し、その詳細が明らかにされている。

ここに取り上げる新発見の有角石器は、草刈遺跡の一部といってもよい草刈六之台遺跡から出土したものである。新発見といっても、すでに草刈六之台遺跡の報告書で弥生時代の石斧として掲載されていたものである(豊田ほか 1994)。現在、千葉県教育委員会で遺物が保管されており、2021年に当該遺跡出土石器の見学者があった際に、遺物を手に取る機会があり、有角石器の一部である可能性が高いことに気づいた。

本稿では、この石器を紹介するとともに、草刈遺跡をはじめ近隣遺跡の有角石器を加えて、これらの石器群からどのようなことが読み取れるのかを考えてみたい。

1 草刈六之台遺跡出土の有角石器

第1図1が、有角石器の一部と考えられる石器である。残存長は4.3cm、上端の残存幅2.5cm、下端の残存幅1.9cm、最大厚1.9cmの小さな破片である。有角石器の柄部が上下ともに折れたものと考えられる。断面形は隅丸の長方形を呈している。通常、有角石器の柄部の両側縁は敲打痕を残しているものが多いが、1は表裏、側縁ともに丁寧に研磨されている。上下端とも折れており、上下端の縁辺に敲打痕が認められ、何らかの意図で再加工が施されているようだ。石材は安山岩と考えられる¹⁾。この小ささでも敲打を施していることから、小型の石斧などを意図して再加工を試みたのかもしれない。1が有角石器と判断されるのは、石材が千葉県内出土の有角石器と同様の安山岩類であること、断面が隅丸の長方形を呈し幅が端部にかけて狭くなることから有角石器の柄部の可能性が非常に高いこ

と、などからである。ただ、幅がこれまでに出土している有角石器の柄部としては小さめで、やや小型の有角石器であろうと考えられる。千葉県内から出土している磨製石剣²⁾も似た断面形を呈するが、県内出土の磨製石剣は刃部から柄部にかけての幅がほぼ変わらないことから、1が磨製石剣である可能性は低いと考えられる。1は、弥生時代後期の堅穴住居跡からの出土と報告されている。

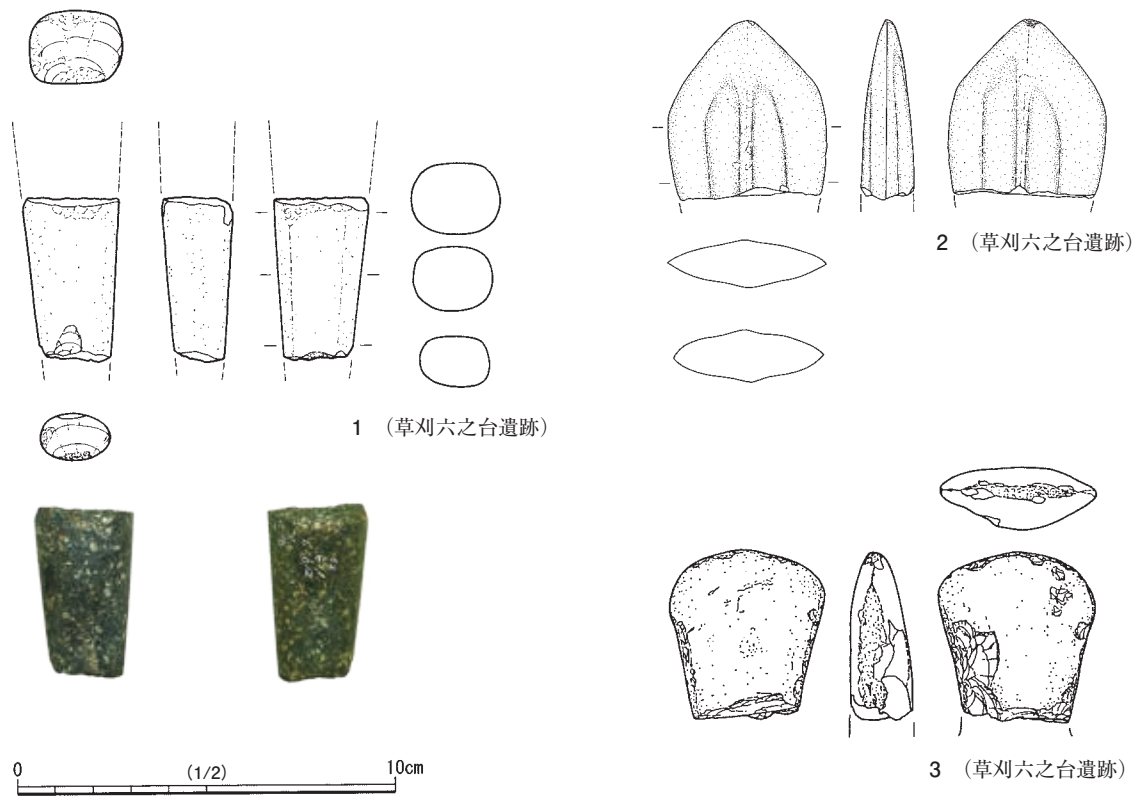
草刈六之台遺跡からは1のほかに、第1図2・3の2点の有角石器が報告されている。2・3ともに刃部のみである。2つの刃部形態は随分異なっている。2は刃部の幅があまり広がらず、先端がかなり尖っている点に特徴がある。これほど先端が尖る例は他県にもほとんど類例がない。表裏ともに実測図ではわかりにくいが中軸線の左右に樋が作り出されている。石材は安山岩である³⁾。2が出土した遺構は、弥生時代後期とされる堅穴住居跡である。3は刃部幅が緩く広がり、蛤刃のような厚みのある形態で、刃部幅の広がり方は、弥生の石斧類の形態とは異なっていることから有角石器と考えられる。刃部先端は広い範囲で潰れており、刃部の側縁に敲打痕を残している。この部分に敲打痕を伴う類例は、千葉県内にはない。石材は砂岩である。出土遺構は、他の時期の堅穴住居跡と複雑に切りあう弥生時代後期と判断された堅穴住居跡である。

2 草刈遺跡出土の有角石器

草刈六之台遺跡の台地とつながっている広大な草刈遺跡の台地からは、破片を含めこれまでに5点の有角石器が出土している。若干だが個々の有角石器について触れてみたい。

第1図4は草刈遺跡E区から出土したものである。古墳時代前期と考えられる堅穴住居跡の覆土から出土したもので、柄部と角部両端を欠いているもののほぼ全体形を知ることができる。刃部は大きな弧を描いて突出する形態である。全面がよく研磨されており、側縁の敲打痕は認められない(小林清ほか 2006)。

第1図5・6は、ともに草刈遺跡F区の弥生時代中



第1図 草刈六之台遺跡・草刈遺跡出土有角石器

期宮ノ台式期の竪穴住居跡から出土したもので、竪穴内から出土した土器・石器は一括性が高いと考えられることから、有角石器の時期を決定するうえで貴重な事例となっている。5は完形、6は刃部のみであるが全体の大きさは5とほぼ同じであったと推測される。石材はともに安山岩である⁴⁾。2点に共通するのが、表裏に施された左右の樋である。樋は浅く実測図では示にくいほどの浅さではあるが、研磨により作り出されている。6の樋はやや両側に広がっている。2点の相違点は、5の刃部がイチョウ形には広がらず先端が尖り、角部から刃部にかけて一定の幅を保っているのに対し、6の刃部両端は緩く広がっており、先端が緩めの弧を描いている。同時期の製作・使用と考えられる有角石器の刃部形態に大きな相違点があるのは重要な点であると言える。

第2図7は、小澤清男の指摘によって、出土地点の異なる2点が接合することが判明したものである(小澤 2021)。これによって草刈遺跡から出土した有角石器は、4個体が出土していることになった。有角石器本体部分は、草刈遺跡M区の弥生後期の竪穴住居跡から出土したものである(山口典子ほか 2011)。報文では、石材は閃緑岩とされている。接合した破片は、草刈遺跡の発掘調査が開始された当初に行われた多数のトレンチによる確認調査で出土したもので、草刈遺跡F区の範囲にあたる確認調査用のトレンチ内から出土したものである⁵⁾。第2図7は2点が接合した状態の図である。本来の形態がイチョウ形に大きく開く刃部形態であることが接合によって確定した。柄部の両側縁には敲打痕がよく残されている。何らかの理由で刃部先端の加撃によって刃部両端を欠くに至ったと考えられ、刃部破片にみられる複数の剥離面の様子から、複数回の加撃が加えられたものと考えられる。有角石器に使用された硬い石材の加工は、素材の粗い剥離作業後、敲打による成形と研磨が行われたと考えられ、再加工を目的にしたとすれば、かなり手荒い加撃によって刃部両端が打ち欠かれている。刃部先端にその後さらに加撃が加えられたことを示す敲打痕を残しており、市原市中潤ヶ広遺跡の出土例の様な完全な刃部の再生に至ることなく、途中で放棄されている。あるいは、単に破壊行為だけが目的であったのかもしれない。7は、全体に板状を呈しており、厚みがやや薄い点に特徴がある。素材の粗割り段階で残った剥離痕をなくすために相当研磨を行ったためなのかもしれない。

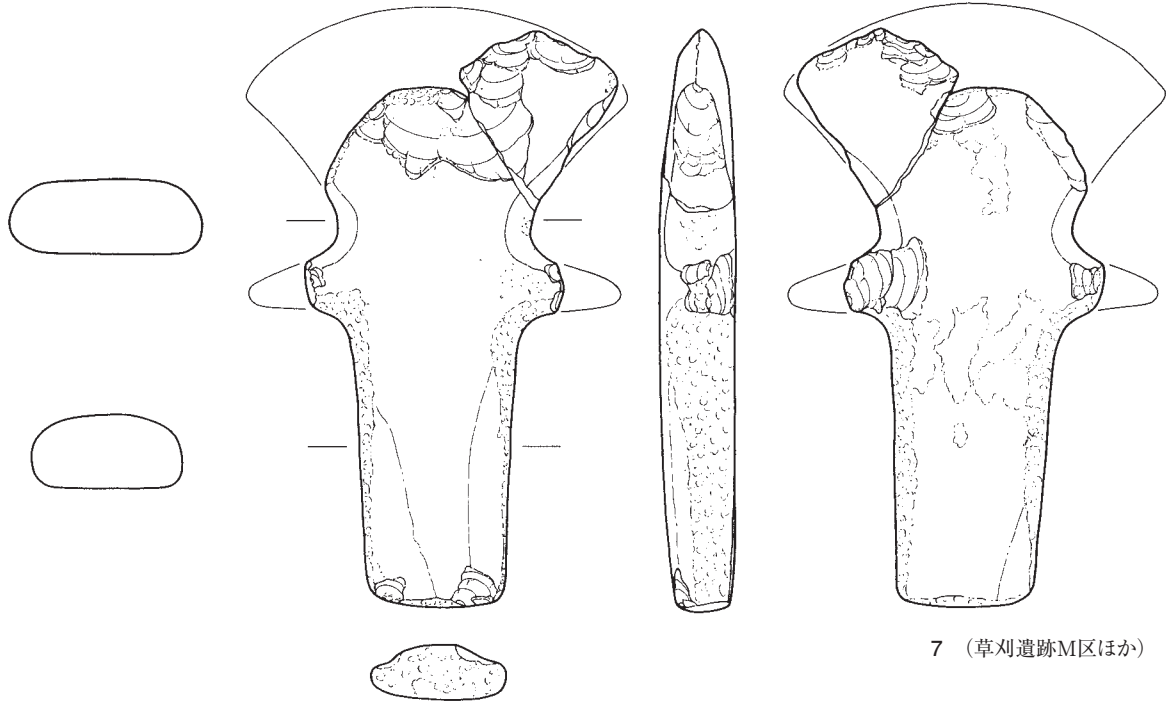
3 近隣の遺跡から出土した有角石器

草刈遺跡の南側を流れる村田川の対岸に位置する市原市中潤ヶ広遺跡からは、第2図8の有角石器が1点出土している(城田ほか 2006)。有角石器を石斧に転用したことが明らかな個体である。本来の刃部がほとんど失われ、残った身の部分に研磨を加えて蛤刃状の刃部に仕上げている。両角部の痕跡が辛うじて残っている。表裏面には樋が存在したことを窺わせる稜線が認められる。柄部の末端が欠損している。装着痕が認められ、柄部中央に認められる白っぽい部分以外は、暗色を呈していた。有角石器としての装着痕なのか、転用されてからの装着痕なのか、あるいは、同様の装着のされ方だったのかは判断できないが、有角石器の装着方法を類推する上では興味深い痕跡を残している。この有角石器は弥生時代後期の竪穴住居跡から出土したもので、石材は閃緑岩と報告されている。

以上みてきたように、草刈遺跡及びその近隣遺跡から8点もの有角石器が出土しており、全国的に見ても、かなり密度の濃い出土地域であるといえるだろう。

4 有角石器の時期

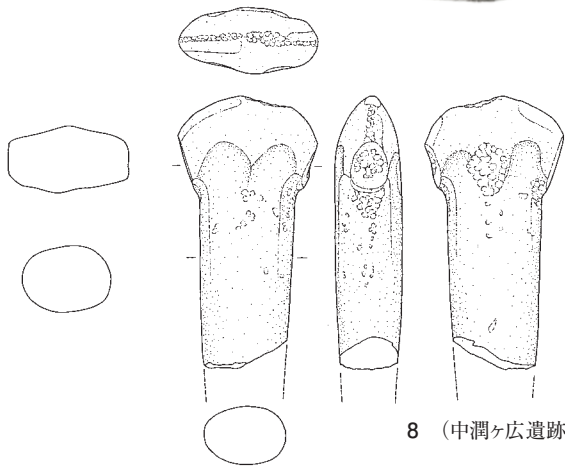
有角石器の製作時期について、小林嵩は弥生時代後期には降らず、大陸系磨製石器の流通が本格化する弥生時代中期後葉に限定されるとしている(小林嵩 2020)。千葉県内の弥生石器については、中期後半の遺跡では、大陸系磨製石器群が高率を占め、砥石や少量の調理具が加わり、後期前半には大型蛤刃石斧や扁平片刃石斧などにほぼ限定され、後期後半には伐採・加工具はほとんどみられなくなるとされている(渡辺ほか 2003・豊田 2004)。今のところ出土例最多の茨城県内には、有角石器の時期を検討する資料に欠けており、千葉や埼玉・神奈川の事例に頼らざるを得ない状況である。弥生時代中期後半の宮ノ台式期に出現し、後期後半の竪穴住居跡からの出土例もあることから、中期後半(IV期)～後期(V期)にかけて使われたとせざるを得ず、その消長は、ほぼ大陸系磨製石器群などと軌を一にしているのであろう。有角石器の製作時期については、小林嵩のいうように中期後葉に限定される可能性もあろうが、後期の竪穴住居跡からの出土例もあることから、使用期間の終焉は後期に入ってからであろう。小林嵩は環状石器について、関東においては弥生時代中期初頭に出現し、中期中葉でやや増加し、中期後葉に最も盛んに製作され、後期にも一部残存していた可能性があるとされており(小林嵩 2021)、



7 (草刈遺跡M区ほか)



0 (1/2) 10cm



8 (中潤ヶ広遺跡)

0 (1/3) 10cm

第2図 草刈遺跡・中潤ヶ広遺跡出土有角石器

有角石器も環状石器に似た終焉の状況を呈するのではないかと推測される。

5 石材産出地と製作地と消費地

有角石器はいったいどこで製作されたのだろうか。小林嵩は、福島県いわき市周辺で製作されていた大陸系磨製石斧、特に大型蛤刃石斧の製作に使用された変質安山岩と、いわき市向山遺跡から出土した有角石器の未成品とみられる石器の石材が同一であること、剥離成形後、敲打段階で折損しており製作技法も共通していることから、向山遺跡が有角石器の製作地であると判断している(小林嵩 2020)。確かに、未成品が出土していれば、その遺跡で製作された可能性は高いかもしれない。しかし、重要な点は、集落内で使用される以上の製作がそこで行われていたのかどうかという点である。他の集落へ出荷するだけの製作が行われたかどうかは、多数の未成品や原石及び大量の剥片がその遺跡で出土しているのかどうかによるのではないだろうか。数点の未成品の範囲内であれば、逆に集落内消費のための製作が各集落で行われたと解釈することもできる。

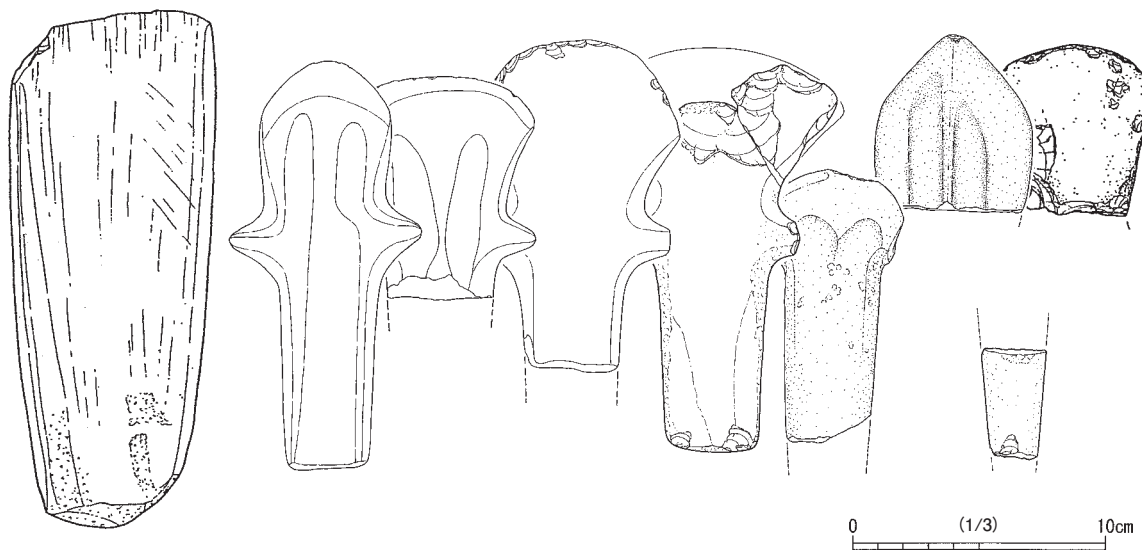
町田勝則は、長野市榎田遺跡で発見された大型蛤刃石斧・扁平片刃石斧を中心とする製作跡の特徴として、遺跡北方500m地点にある保科玄武岩類の山塊から直接原石を採取し、大型蛤刃石斧の製作には原石からの剥離成形後の敲打成形までのものが集落外に搬出され、

研磨段階のものはほとんどみられないこと、扁平片刃石斧は研磨段階以降のものが搬出されていたことなどを挙げている(町田 2010 a・b)。有角石器については、榎田遺跡で見られるような製作に伴う剥片や未成品が出土している遺跡は、今のところ発見されていない。

千葉県内資料に限ってみても、大型蛤刃石斧に多く見られる安山岩類が、有角石器にも使われているのが一般的であることから、石材産地については、いわき市周辺で産出する小林のいう変質安山岩が有角石器の主要な石材の一つとして流通していた可能性は高いのかもしれない。ただ、今のところ、福島県南部から茨城県北部にかけての地域では、有角石器の出土点数が微量であること、有角石器の流通を担いそうな茨城県北部の日立市十王川周辺の中期集落などからの出土例も微量であり、いわき市周辺などの遠隔地から有角石器文化の中心的地域となっている茨城県霞ヶ浦北東部や千葉県東京湾岸東岸域にある程度の量の成品が流通していたと言えるのかどうか疑問が残るところである。

おわりに

現在、有角石器の分布については、千葉県および茨城県南部にその中心があり、関東一円から東北南部にその分布域が広がっている(岡本 1999・小林嵩 2020)。有角石器の中心地域には、今のところ製作遺



第3図 大型蛤刃石斧と有角石器の比較

跡は見つかっておらず、石材産地もこの地域には見出されていない。

改めて有角石器の形態的特徴についてみると、個体差が最も現れているのが刃部であること、特に刃部幅にばらつきがあり、これは石斧類における刃部の制約とは大きく異なっているという特徴がある。硬い石材を使用した太型蛤刃石斧の製作工程には、原石からの剥離段階、整形の敲打段階、仕上げの研磨段階があり、有角石器も硬い安山岩類を石材としているものが多いことから、太型蛤刃石斧とほぼ同じ製作工程を踏んでいたと考えられる。石斧の製作に比べ角部の作り出しには、太型蛤刃石斧以上に丁寧な敲打の工程が必要だったことは、想像に難くない。

第3図に草刈遺跡I区から出土した草刈遺跡最大級の太型蛤刃石斧⁶⁾と有角石器群を並べてみた。草刈遺跡E区や接合したM区の有角石器の幅はこの石斧をやや上回るものの、ほぼ太型蛤刃石斧の長さや幅、厚さの内に収まっている。千葉県多古町出土例のように刃部幅が10cmを超える大型のものもあるが、有角石器の製作には、太型蛤刃石斧の大きさとはほぼ同程度の素材が必要であったことがわかる。榎田遺跡のように、太型蛤刃石斧がひと手間加えれば完成するような完成品直前の段階で流通していたように、有角石器もひと手間が必要な段階で流通していたのだろうか。専門集団による完成品が流通していたとすれば、刃部形態にもある程度の規格性が認められてもよいと思われるが、草刈遺跡周辺の諸例をみただけでも刃部には多様性があり、成品として流通していた可能性は低いのではないか。榎田遺跡からは、未成品だが磨製石剣2点と石戈1点が出土しており、榎田遺跡内で原石から製作されていたことは間違いないだろう(町田 1999)。磨製石剣2点の未成品の形態をみると、原石から剥離した段階の素材には形や大きさに違いがあり、それに応じた完成品には自ずと個体差があり、酷似した成品が多量に製作できたかといえ、はなはだ疑問ではある。

榎田遺跡ですら、自家消費量を超えて他の集落へ流通させていたのかどうか判断は難しいかもしれない。中部高地一帯でも出土点数は限られており、受注生産的な小規模な製作が行われていたのかもしれない。

現在、長野、新潟、群馬、埼玉の4県には有樋石戈や無樋石戈が分布しており、茨城県では有孔石剣なども出土している。埼玉県熊谷市前中西遺跡から出土した石戈には、近畿型石戈の特徴を写した複合鋸歯文を両面に施す有樋石戈が出土している(松田 2017)。ま

た、同県深谷市宮ヶ谷戸遺跡で採集された九州型石戈と見られる無樋石戈の出土例もあることから(青木ほか 2017・石川 2018)、中期後半には大陸系磨製石器の流通と共に、多様な石戈の成品や情報が、関東一円に流入していたことはほぼ間違いなく、かつては出土例がなかった関東においても、多様な石戈の出土例が加わった現在、草刈遺跡の有角石器に見られる樋などは、埼玉県熊谷市前中西遺跡例のような近畿型石戈の特徴を知っていた者による製作とみるべきだろう。樋の有無自体は、新旧といった製作時期を示しているのではなく、特定の地域に反映された属性の違いとしてみたほうが良いのかもしれない。

なぜ有角石器には硬い石材が選ばれたのだろうか。石材産地について長野市やいわき市などの遠隔地からの流通しか考えられないのだろうか。千葉県内に限ってみても、大陸系磨製石器の石材は様々な石材産地からの流通によって支えられていたことは間違いなく、有角石器一つをとっても、石材は安山岩などの火成岩のほか、閃緑岩などの深成岩や砂岩などの堆積岩も少量だが認められる。

茨城県内で有角石器が集中している地域が、霞ヶ浦の北西部地域である。この地域は筑波山に隣接している。筑波山塊は、中生代の堆積岩類、それらを原岩として変成された筑波変成岩類、ハンレイ岩類、花崗岩類からなり、さらにこれらの岩体を貫いて安山岩の岩脈が分布している。筑波花崗岩の主要な岩相は斑状黒雲母花崗閃緑岩、片状黒有雲母トータル岩、中粒白雲母黒雲母花崗岩、細粒花崗岩類で、これらのうち最も広く分布する斑状黒雲母花崗閃緑岩は筑波山のハンレイ岩類を取り囲む形でまとまって分布しているという(高橋ほか 2011)。筑波山周辺には、今のところ石斧類の製作地とみられる遺跡は見つかっていない。筑波山塊の岩石が、霞ヶ浦北東部に集中する有角石器や太型蛤刃石斧などの石材として利用された可能性はないのか、今後詳しく検討される必要があるのではないかとと思われる。

石川日出志は、中部高地一帯の石戈類は、儀礼の道具である戈の部品として製作されたのち着柄され、おそらく模擬戦を演じるような所作を伴う儀礼の場で使用される。その本来の役割を終えると、しばしば身部の破断が行われ、さらに破断面を研磨したり、斧刃の研ぎ出しが行われる。その上さらに、斧刃への加撃や石戈の破砕まで行われる場合があるとしており(石川 2018)、7の草刈遺跡M区例に見られる加撃の痕

跡や多くの有角石器に見られる身の欠損なども、中部高地一帯の石戈類のあり方と類似した経緯をたどっているのかもしれない。そのような視点での検討もまた必要であろう。

以上みてきたように、有角石器には依然として不明な点が多い。発生の経緯やその終焉、生産用具とは考えられない有角石器の石材に大型蛤刃石斧と同様に硬い石材が選択された理由、主要な石材産地はどこなのか、石材産地を背後に伴わない地域が、その中心的な地域となっているのはなぜか、副葬品と考えられる出土例がなく、石斧類などと同じように廃棄されている理由は何かなど、興味深い検討課題がたくさん残されている。

今後は、形態的な特異性だけにとらわれず、中部高地から関東に流入してきた多様な石戈の分析や大陸系磨製石斧類における生産や流通の動向などを合せ複合的な分析を行っていく必要があるだろう。

注

- 1) 小林嵩によれば有角石器の多くは「変質安山岩」を石材としているという。1の有角石器も小林の言う「変質安山岩」であろう(小林 2020)、これまでの報告書や研究者による石材の鑑定がまちまちであることから、鑑定には慎重な分析が必要であることを痛感する。
- 2) 草刈遺跡 I 区から武器形石器の 1 つである石剣が 1 点出土している(小高春雄ほか 2011)。棒状を呈し刃部から柄部にかけて幅や厚みにほとんど変化がなく、断面は楕円形を呈している。一見、鑿形石斧などと形状はあまり変わらない。異なる点は、尖頭器状に先端が尖り木工具としての刃部形態を呈していないことから、生産用具としての石斧には当てはまらない。類例は、市原市大厩遺跡(中村ほか 1974)、四街道市戸崎館址(大橋ほか 1986)などから出土している
- 3) 石材は、小林嵩のいう変質安山岩と思われる(小林 2020)。
- 4) 千葉大学近藤精造名誉教授による鑑定では安山岩とされている(宮城 1985)。小林嵩によれば変質安山岩とされている。
- 5) 草刈遺跡の調査開始当初全域で行われたトレンチ調査で出土した遺物のうち、この有角石器の破片が草刈遺跡 F 区の区域内から出土していることから、(小高春雄ほか 2013)に掲載されたものである。(小澤 2021)ではトレンチ地点も図示されているが、遺構に伴ってはいない。
- 6) (小高春雄ほか 2011)の文献 P.296 第 222 図石 25
- 7) 四街道市相ノ谷遺跡からも榎を伴う有角石器が出土している(東京電力北総線遺跡調査会 1982)

参考文献

- 青木克尚・松田哲 2017「深谷市宮ヶ谷戸採集の石戈」『埼玉考古』第 52 号
- 石川日出志 2018「磨製石戈と弥生文化」『季刊 考古学』第 143 号 株式会社雄山閣
- 大橋康二ほか『下総国四街道地域の遺跡調査報告書 - 池ノ尻館址・戸崎館址・前広遺跡 -』中野遺跡調査団

- 岡本孝之 1999「足洗型石器の研究」『考古学雑誌』第 84 巻第 3 号 日本考古学会
- 小澤清男 2021「有角石器の遺跡内接合例(1) - 千葉県市原市草刈遺跡出土の有角石器の再検討 -」『婆良岐考古』第 43 号 婆良岐考古同人会
- 小高春雄ほか 2011『千原台ニュータウン X X VI - 市原市草刈遺跡 (I 区)』千葉県教育振興財団調査報告第 647 集
- 小高春雄ほか 2013『千原台ニュータウン X X X - 市原市草刈遺跡 (F 区) -』千葉県教育振興財団調査報告第 647 集
- 小林清隆ほか 2006『千原台ニュータウン X IV - 市原市草刈遺跡 - (D 区・E 区) -』千葉県教育振興財団調査報告第 543 集
- 小林 嵩 2020「有角石器の分布と意義」『古代文化』第 72 号 第 3 号
- 小林 嵩 2021「関東地方における環状石器の基礎的研究」『駿台史学』第 172 号
- 城田義友ほか 2006『潤井戸地区埋蔵文化財調査報告書 II - 市原市中潤ヶ広遺跡(上層) -』千葉県教育振興財団調査報告第 543 集
- 杉山浩平 2010「関東」『季刊考古学 特集 石器生産と流通にみる弥生文化』第 111 号 雄山閣
- 高橋裕平ほか 2011「筑波山周辺の深成岩と変成岩」『地質学雑誌』第 117 巻 補遺
- 豊田秀治ほか 1994『千原台ニュータウン VI - 草刈六之台遺跡 -』千葉県文化財センター調査報告第 241 集
- 豊田秀治 2004「(4) 工具類」『千葉県の歴史 資料編 考古 4 (遺跡・遺構・遺物)』
- 東京電力北総線遺跡調査会 1982『北総線』
- 長野市教育委員会 1991『松原遺跡』長野市の埋蔵文化財第 40 集
- 中村恵次ほか 1974『大厩遺跡』財団法人千葉県都市公社
- 町田勝則 1999『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 12 榎田遺跡』長野県埋蔵文化財センター
- 町田勝則 2010 a「中部日本」『季刊考古学 特集 石器生産と流通にみる弥生文化』第 111 号 雄山閣
- 町田勝則 2010 b「伐採石斧」『季刊考古学 特集 石器生産と流通にみる弥生文化』第 111 号 雄山閣
- 松田 哲 2017「埼玉県熊谷市前中西遺跡出土石戈の概要」『考古学研究』第 64 号 3
- 宮城孝之ほか 1985「市原市草刈遺跡出土の有角石器について」『研究連絡誌』第 12 号 財団法人千葉県文化財センター
- 宮城孝之 1985「有角石斧の新例と若干の考察」『研究連絡誌』第 13 号 財団法人千葉県文化財センター
- 山口典子ほか 2011『千原台ニュータウン X X VII - 市原市草刈遺跡 (M 区) -』千葉県教育振興財団調査報告第 651 集
- 渡辺修一・高花宏行 2003「3 生産活動と人々の生活」『千葉県の歴史 資料編 考古 2 (弥生・古墳時代)』